

# 最終報告書

## Community-Based-Tourism in North Vietnam

須藤航介(青山学院大学2年)

宇佐美紘一(東京大学3年)

王ジェニー(日本大学4年)

深澤享平(中央大学2年)

### 1、動機

今回の調査において我々の班にとっての最終的な目標はベトナム国内、特に北部山岳地帯の農村に依然として残る貧困問題の解決策を探ることである。

ベトナムは社会主義的計画経済から、1986年のドイモイ政策による市場経済に転換し、現在は大きな発展を遂げる国である。市場経済への転換は貧富の格差を生み出したが、ベトナム政府の貧困対策は成果を挙げ、貧困層は減少され、解決に向かっている。地方の飢餓状態(食料貧困ライン)の割合が1992年では29.1%とほぼ3人に1人であったが、2004年には8.9%にまで下がり、飢餓状況はかなり改善されたと言える。

しかし貧困層は都市部に比べ、農村での貧困問題は深刻であり、未だに問題は残されている。2004年には都市の貧困率が10.8%、地方が27.5%とその差は2.5倍にあたり、地方では依然として4人に1人以上が貧困状況にあることが分かる。その中でも北部、特に山岳地帯は国全体の貧困層の28%を占め、多くの少数民族は貧困に苦しんでいる。

一方ベトナムにおける観光業は大きな産業であり、更なる拡大が見込まれている。ベトナム観光業の1990年の外国人訪問者数は25万人であったが、2006年には約360万人まで増加した事からもその成長が見られる。WTTC(世界旅行ツーリズム協議会)(2007)の試算によれば、向こう10年間、ベトナムの観光部門は年平均7.8%の率で成長すると予測されている。ベトナム観光総局によると観光業界が2010年にもたらす金額は推定でGDPの6%に相当し、2020年には、これがGDPの13.1%に増加する見通しである。

現在の観光についての先行的な研究では、Pro-Poor Tourismという貧困克服のための観光の利用が注目を浴びている。観光業の運営形態や開発の方法によって、貧困層

の生活の向上が見込まれるが、貧困層が観光から得られるプラスの影響は、雇用創出や所得向上だけに止まらなると考えられている。

ベトナムの貧困問題の残る北部山岳地帯は、豊かな自然の残る農村地帯でもあり、多くの少数民族が暮らすなど、観光資源が豊かな地域である。

そのため我々の班では観光業が貧困問題の解決に利用できる可能性を探り、さらに現在のベトナム観光業が抱える問題点の解決を目指し、調査を進めることにした。

## 2.背景調査

### 2-1 観光産業と発展途上国

60年代には観光産業はその経済的な効果から、途上国の経済的自立を促す手段として、世界銀行や国連などの多くの国際機関から奨励されていた。しかし、観光開発は様々な問題を内包するものでもあった。

観光開発のプラスの効果には以下が挙げられる。

- 1、外貨獲得などの直接的経済効果
- 2、雇用創出効果
- 3、起業、参入が容易
- 4、間接的効果（Linkage 効果）
- 5、インフラへの投資

国際観光は産業の弱い途上国でも、観光資源が豊富であれば外貨の獲得を期待出来る手段として注目された。間接効果とは観光業が発展することで、例えばホテルなどを建設することで、建設業、さらにその材料となる木材も売れるなど、経済の波及効果の事を指す。さらに観光の為にインフラへの投資により、観光客だけではなく地域住民もその恩恵を得られることなどがプラスの効果に挙げられる。

これに対し、マイナスの効果には以下が挙げられる。

- 1、環境破壊
- 2、雇用創出効果への疑問
- 3、物価の上昇（観光地価格）
- 4、犯罪の増加（治安の悪化、観光客目当ての犯罪など）
- 5、Leakage 効果

Leakage 効果はツーリズムの恩恵が実は途上国に落ちずに、先進国に漏れている事を

指す。例えばリゾート経営などに乗り出すのは途上国の企業ではなく、その大奥は先進国の企業であり、この外資のリゾート地で使ったお金は途上国に落ちずに、先進国に漏れることになる。Leakage 効果はタイなどでは 80%にも上ると言われており、途上国の観光産業が抱える大きな問題となっている。またリゾート地での高いサービスを保つ為に、人材なども先進国から調達する事があり、雇用創出効果にも疑問がある。

## 2-2, 観光の形態

・観光の形態は次の二つに分けることが出来る。

1、マス・ツーリズム (mass tourism): 一般的な、大衆化・商業化された観光。1950 年代には米国に出現し、1960 年代には西欧諸国にも形成されている。1969 年のジャンボジェット旅客機の就航により国際観光の大量化・高速化が決定的なものとなった。大型ホテル・旅館の開業等、運輸・宿泊関連の拡充とそれに伴う低価格化により、多くの人に観光が利用されるようになった。国際観光の拡大によって、産業の弱い国にとって観光業は外貨獲得の手段として重要なものとなったが、大勢が一度に訪れることで環境汚染、自然破壊、伝統的な文化への悪影響が顕在化してしまった。

2、サステナブル・ツーリズム (sustainable tourism): 「持続可能な観光」という意味で、マスツーリズムの結果生じがちな、環境や文化の悪化、過度な商業化を避けつつ、観光地本来の姿を求めていこうとする考え方。導入に至るには、自然保護区に指定されるような場所を保全し持続させるため、観光客・観光事業者・周辺住民がそれぞれの役割を果たすことが必須条件となる。そのためには観光客数の上限や移動手段や宿泊施設などの制約が求められ、それによって導入前より旅行費用は高くならざるを得ない。サステナブル・ツーリズムによる収益は、人間の手によって荒らされた環境や文化の修復・回帰を図るための資金となり、周辺住民(貧困者層など)の雇用確保にも繋がる。

今回の調査では農村に残る貧困問題の克服をテーマとしている為に、観光業の特にサステナブル・ツーリズムに焦点を置いて考えていきたい。

サステナブル・ツーリズムは、その対象や運営方法によって、さらに細かく以下のように分類される。

- 1、エコツーリズム: 自然環境・文化・歴史を観光資源とし、持続可能性を考慮したツーリズム。
- 2、ルーラルツーリズム: 農村を観光資源としたツーリズム。アグリツーリズム、グリーンツーリズムとも呼ばれる。
- 3、クラフトツーリズム: 伝統工芸を観光資源としたツーリズム。

- 4、エスニックツーリズム：少数民族を観光資源としたツーリズム。
- 5、コミュニティ・ベースド・ツーリズム：コミュニティレベルで管理・運営されるツーリズム  
これらは持続可能性というキーワードで互いに重なりあう概念である。

## 2-3, コミュニティ主体のツーリズム Community-Based Tourism

\* Community-Based Tourism (CBT)とは：マスツーリズムにおいてはその主体である旅行会社が、観光資源となる地域住民への正当な利益配分を行わない事や、地域のキャパシティを越えた観光客の流入による自然破壊や伝統的な文化への影響などの批判がなされた。こうした問題を克服するために、地域が観光のイニシアティブを握り、運営・管理するツーリズムの形態を Community Based Tourismと呼ぶ。今回の研究では、特に CBT の観光形態による貧困克服の可能性に焦点を当てることにした。

### CBT の効果

- 1、コミュニティ内での適正な利益配分の達成
- 2、自然・文化の保存
- 3、地域間の所得・雇用の格差を克服
- 4、アイデンティティの再評価
- 5、地域の活性化

## 2-4, ベトナムにおけるクラフトツーリズム

### \* クラフトツーリズムとは

・伝統工芸を観光資源としたツーリズム。地域の住民は伝統工芸品を生産し、その販売を村落単位で行うことで地域の活性化に繋げ、観光客の呼び込みを行う。観光客は職人の技術に伝統や文化を感じ、製品を購入することでその保全に一役買うことになる。クラフトツーリズムは東南アジア諸国で著しい発展を遂げており、タイ・マレーシア・インドなどでも成功例が見られる。ベトナムではバチャー陶芸村を始めとした工芸村が多く存在し、大きな観光資源となっている。CBT の一つの形態と言える。

### クラフトツーリズムの意義

- 1、安定した雇用の創出（季節に左右されない。観光客への直接販売であるため、仲介者がいないので、高い利益を上げられる）
- 2、伝統文化の保存
- 3、過疎化の抑制（農村・都市間の所得格差の縮小）

伝統工芸の生産は季節による影響が無い為、観光業には付き物である繁閑の差が無い。自然を観光資源としたツーリズムとは対照的に、観光客は一年を通してクラフト村に訪れるため、安定した雇用を創出することが出来る。

また、クラフトツーリズムの特徴は、伝統工芸品をその村で、直に観光客に販売できる点である。そのため販売は仲介業者を挟まないシンプルなものであり、マージンをとられないために、生産者は高い収益を上げることが出来る。さらに、伝統工芸品そのものが観光資源であるために、これを保存することが出来、伝統文化の保存に繋がる。

ベトナムでは農村から都市への人口の流出が問題になっているが、農村での雇用を創出することで、この人口流出を抑えることが出来る。

ベトナムでのクラフトツーリズムは、バチャー村のような大きな成功例もあるが、失敗例もまた多く見られる。ツーリズムの大きな柱となることが考えられるが、未だ問題点も多々ある。

#### 2-5, タイ、カレン族の CBT の事例

タイの山間民族であるカレン族は、少数民族であり伝統的な生活を守ってきたために、文化的に劣った民族であるとみなされてきた。また、伝統的な焼畑農法は環境破壊であるとして、非難の対象とされてきた。しかし一方でその牧歌的な生活スタイルや持続可能な森林利用は、一部の知識人や NGO から注目を集め、価値を見出されてきた。カレン族は NGO であるミラー財団の支援のもとで、一部のツアー会社と協働でのエコツーリズムを導入した。地域住民が観光の運営に大きく関わることで、コミュニティ内での適正な利益配分を達成することが可能となった。また伝統的な生活文化を、持続可能性という概念を通して観光客に伝える事で自らのアイデンティティを再確認することとなり、伝統的な文化に対して誇りを持つようになった。

#### 2-6, ホームステイプログラムの事例

- 1、投資が少なくても可能。村民なら誰でも参加可能。
- 2、インフラの改良による、生活環境の向上
- 3、観光業を通じた地域の連帯
- 4、住民の意識の変化

CBT の方法として、最も効果的であるのがホームステイプログラムである。観光・宿泊

施設やインフラ設備などの初期投資が大きな負担となってしまう従来の観光形態に比べ、ホームステイプログラムは初期投資が少なくて済む。そのために村民であれば、少数の観光客の為に部屋やトイレの設置などの投資さえ可能であれば、誰でも参加が可能となる。

#### 2-7, ベトナム観光業の問題点

・現在、ベトナム観光業は次のような問題を抱えている。

1、CBT が未発達であること(サスティナブル・ツーリズムに関する問題点)

2、ステイ期間が短い

3、リピーター率が低いこと(マスツーリズムに関する問題点)

(2, 3 に関して) 都市と農村地域、あるいは沿岸と山岳地帯の観光開発の不均衡は、ベトナムにおける観光産業に多くの問題を発生させている。ベトナムの観光総局(VNAT)によると、ベトナムにおける70%の観光地やリゾートは沿岸地域にある。また、山岳地帯の少数民族に訪問するのに、ハノイからサパへのコースしかないのは現状である。

ベトナムにおける観光産業の最大の弱点は、国際観光客の滞在期間が短いと言われ、平均滞在期間は4日～6日程度である。これに比べて、タイやマレーシアでは7～10日程度である。そして、国際観光客のリピーターは30～40%である。これはタイやマレーシアなどの近隣国の60～70%に比較すると、リピーター率が低い。

今回は貧困の解決を目的としているので、1に焦点を絞る。

#### 2-8, CBT が未発達であることの問題点

それでは、CBT が未発達であることの問題点とはなんだろうか？

現地住民にとって最前の観光開発は、観光地域に負担がかからずさらに正当な利益配分を達成することが出来る CBT である。CBT が未発達であるということは、すなわち地域住民が観光のあり方を自分達で選択することが出来ず、よって得られる恩恵を十分に享受していないということである。このことから、我々は貧困問題の解決の為にはベトナムにおける CBT の定着、発展が必要だと考えた。

### 3, 目的

・ベトナム国内に未だに残る貧困問題と観光業が抱える問題の解決には、CBT に基づいた観光開発が有効であり、ベトナムでの CBT の概念の定着・発展には、いくつかの条件が不可欠である。ベトナムでの CBT の成功の可能性を研究することで、持続可能な

観光による農村の貧困問題の解決策を考えたい。

#### 4, 仮説

ベトナム北部山岳地帯の貧困問題を解決する為には、CBTによる観光開発が有効であり、CBTの成功条件は以下の5つである。

- 1、様々なアクターの協力体制が築かれていること。
- 2、観光資源が豊富であること
- 3、観光が副次的な収入であること
- 4、コミュニティに結束力があること
- 5、個人的な利益を優先しないこと。

行政や旅行会社、地域住民、NGOなど、これらのアクターの協力体制がCBT開発には重要だと考えられる。観光資源が豊富であることは、CBTのみならず観光全般に当てはまる条件である。またツーリズムは流行に左右されやすいので、ツーリズムが主な収入源である場合、ツーリズムで失敗することが新たな貧困の原因になってしまう恐れがある。その為、観光はあくまで副収入とし、生活水準を向上させる手段であることが、観光のリスクを軽減する為に必要であると考えられる。観光の恩恵の受益に関して、個人の利益が全体の利益を害する場合は、個人の利益を優先しないことが求められる。CBTを通して魅力的な地域を作り出すには、個人的な利益よりも全体的な利益を優先しなければならない。その為にはコミュニティの結束力も当然必要となってくる。

現在はこの条件が満たされていない為に、ベトナムのCBTは未発達なのではないか、と仮説を立てた。

#### 5, 国内訪問先

須永 和博先生へのインタビュー調査（獨協大学専任講師）

観光と少数民族の文化を研究されている須永先生には、タイでのカレン族のCBTの実態や、CBTの成功条件などについて伺った。観光業は流行廃りのある産業であるため、観光業を貧困克服の手段として積極的に利用することが、結果として新たな貧困を生み出してしまうケースがある。観光は副次的な収入源で無ければいけないが、その為には地域住民の生業に支障の無いように行わなければいけない。ここから、絶対的な貧

困下では CBT が成功しないことが考えられる。貧困はお金がないことではなく、力が無いことである。観光は経済的な貧困克服手段としてはリスクが高い。しかし CBT には、自身のアイデンティティの再確認やコミュニティの結束など、経済的な面以外のプラスの効果があり、そちらには大きな意味がある。

## 6, 現地調査

- ・Vietnam Handicraft Research and Promotion Center (HRPC)
- ・JICA ベトナム事務所
- ・Footprint(旅行会社)

Handicraft research and promotion center では CBT の枠組みの中で実際に NGO がどのように働きかけているかを伺った。この団体では地域住民のマーケティング能力・運営能力不足を補っている。地域住民が主体となる CBT において、ツーリズムのイニシアティブは住民が握ることになるが、住民が考えるツーリズムが、ツーリストのニーズを正確に掴めていない場合が多々ある。例えば地域住民は宿泊施設はモダンでテレビなどの設備も整った環境を理想として挙げるが、実際にベトナムの農村にまでホームステイに来るツーリストが望むのは伝統的で簡素な生活スタイルであり、そこにズレがある。

また、フーラン村という農村の運営形態を伺った。この農村では地域住民で運営、地場産業、ガイドの 3 つのグループを形成し、それぞれの役割を明確にし、村全体での受け入れ態勢が整備なされていた。観光産業への参加を望む住人はコミュニティの中でそれぞれの能力を活かした分業体制で CBT を作り上げている。

JICA ベトナム事務局では、実際にどのようなプロジェクトが行われているのかを伺った。JICA ベトナム事務局での観光の目標は Benefits for community, Improve livelihood ということで、地域住民が観光の恩恵を受益し、生活水準を上げることであり、その為のアプローチとして観光資源の保全と利用、コミュニティの観光ビジネスの活性化、観光の負のインパクトの最小化など挙げていた。また、ここでは目的は貧困削減ではなく、地域振興が目的の手段としての観光が求められている。

実際に行われているプロジェクトではヘリテージツーリズムによる持続可能な地域振興プロジェクトがある。このプロジェクトではドンラム村・フクティック村・ドンホアヒエブ村の三農村で観光資源を活かした観光による開発を行っている。この三農村がプロジェクトの対象に選ばれた理由は、それぞれの農村がベトナムの各地域(北部・中部・南部)の特徴を有し、観光資源の豊富な伝統的農村だからである。



ベトナムではツーリズムの歴史は浅いが、現在ではコミュニティ開発・地域振興が政策として打ち出されている。地域振興の理想は地域の特性を活かした、エリアで魅力的なものを生み出すことだ。その為には持続可能というだけでなく、自律的な観光というのがキーワードになる。外側からのアイデアではなく、地域住民の側からのアイデアで観光を盛り上げていくことが今後の課題となる。JICAで行われているプロジェクトも、他地域で応用可能なものであり、全国各地でツーリズムを盛り上げる為のガイドライン、マニュアルと成り得るものである。

実際に我々も Footprint という会社を通して、3泊5日の CBT ツアーを行った。内容はサパ地域の山岳トレッキング、少数民族の家でのホームステイなどである。CBT ツアーを通しての考察としては以下の通り、仮説で述べた CBT の成功条件と照らし合わせてみる。

旅行会社・NGO と地域住民の協力体制は上手くいっていたようで、素晴らしい景色や、少数民族の方との交流など、観光資源も豊富だった。ツーリズムに従事している方々に質問してみたところ、多くの人にとっては農業も行いながらの副業だった事も分かった。詳細なアンケートなどが出来なかったので、コミュニティの結束力については計ることは出来なかった。個人的な利益の非優先に関しては、CBT に関わる人について言えば達成できていたが、SAPA の町全体でみれば未だ利己的であると言える。

## 7. 結論

観光産業の持つリスクを軽減する為には、観光は副次的な収入源でなければいけない。このことから、観光業に携わることが出来るのは農業に余裕のある世帯であるので、比較的裕福な世帯のみが観光業に従事出来る事が分かる。実際にツアー中にこのことから、CBT の恩恵を受けられるのは中間層であり、CBT は最貧層の貧困削減には向かない、ということが言える。

しかし、最貧困層には恩恵が届きにくい、CBT はコミュニティのエンパワーメントを可能にし、地域振興の要となるとも言える。

また、CBT は住民の自身に結びつき、かつ自立的なものであるべきだと、我々は考えた。

## 8. 今後の課題

ベトナム観光業の今後の課題としては、行政関係者の人材育成と工芸品の販売方法

の改善が挙げられる。サパでは工芸品の生産、販売は個別に行われ、これは個人の収入になるためにツーリストの奪い合いが起きている。

これに対し、タイのカレン族の CBT では女性グループと呼ばれる住民組織をつくり、個別に生産された織物が織物センターに集められる。売り上げの 8 割は生産者に、2 割はグループの基金となるため、工芸品の購入はツーリストにとっても生産者にとっても魅力的なものとなっている。ベトナムでもこのようなシステムを導入することで、個人的な利益の非優先を達成できるのではないか？

#### 9、参考文献

- ・江口信清 藤巻正巳（編著）（2010）「貧困の超克とツーリズム」（明石書店）
- ・江口信清 藤巻正巳（編著）（2010）「グローバル化とアジアの観光 ～他者理解の旅へ」
- ・D. J. テルファー、R. シャープリー（著）「発展途上世界の観光と開発」（古今書院）
- ・遠藤英樹、堀野正人 「観光社会学のアクチュアリティ」晃洋書房
- ・Vu Nam （2009）「ベトナムにおけるクラフトツーリズムと地域開発」熊本大学社会文化研究 7, 165-180, 2009-03-23
- ・須永和博 「マイナー・サブシステムとしての観光：タイ北部の山地カレン社会におけるコミュニティ・ベース・ツーリズム」立教大学観光学部紀要 11, 53-67,172-173, 2009-03-25